

ICTを活用した教育体制構築に関する実証事業 報告書

1. 学校名
香港日本人学校香港校 香港日本人学校大埔校
2. テーマ
学びを止めない教育体制構築のために
3. 取組の概要
<p>香港日本人学校は抗議活動と新型コロナウイルスによる休校が長期化したことを受け、児童・生徒の学びを止めないために、2020年4月21日より Zoom と GoogleClassroom, ロイロノートによるオンラインでの学習を開始した。当初は休校期間中の学習として始めたが、学校再開後も対面での活動が禁止され、対話的な学びを行うことは難しく、児童・生徒が互いの意見を交換し学び合うために Zoom を活用した。他にも、異学年交流ができない、大勢が一つの場所に集まれないという制限があったため、委員会活動や縦割り班活動、全校集会や保護者懇談会等もオンラインでの利点を生かして行った。</p> <p>このように、Wi-Fi が整備されたことやオンラインで学習できるシステムが構築されたことにより、休校期間中は各教室からオンライン学習を行ったり、学校が再開した際は様々な制限がある中で種々の活動を行ったりすることができた。課題はあるものの、コロナ禍でも学びを止めずに子ども同士が関わり合いながら学び合っていることが何よりの成果である。</p>
4. 取組の背景・目的
<p>(1) はじめに</p> <p>香港日本人学校(Hong Kong Japanese School and Japanese International School)は、日本国政府の海外子女教育政策に基づき、香港在住邦人の総意によって設置された教育施設であり、それと同時に香港政府によって正式に認可された私立学校である。香港日本人学校には香港校と大埔校があり、大埔校は小学校のみ、香港校は小・中併設である。また、大埔校には、国際バカロレア(IB)のカリキュラムで授業を行う国際学級(International Section)も併設されており、現在 20 カ国籍、4 歳から 11 歳までの児童が学んでいる。</p> <p>「香港校」は、当地香港で戦後初めて、昭和 41 年(1966 年)に設立された、55 年の歴史を持つ私立の小・中学校である。文部科学省の認定を受けた「在外教育施設」として、日本の義務教育を当地でも実践することを使命としている。香港校の校舎は、香港島のハッピーバレー(Happy Valley)という場所にあることから「ハッピーバレー校」と呼ばれることもあるが、正式な名称は、「香港日本人学校香港校」である。</p> <p>「大埔校」は、香港日本人学校小学部(現・香港校小学部)の児童増加に伴って新たな学校が必要となり、1997 年(平成 9 年)に、自然豊かな大埔の地に開校した。香港の中心街から北へ約 20km の大埔自然保護区に面し、緑豊かで穏やかな吐露湾を窓から眺める高台にあり、学校の近くには、開校以来親しく交流をしているティンカーピン校や香港中文大学がある。</p> <p>香港日本人学校は当地で義務教育を実践するという使命を果たすとともに、日本、そして世界の未来を担う子どもたちの「生きる力」を育成するために、どんな状況においても学びを止めることなく教育活動を行っている。</p> <p>(2) 「学びの保障」の在り方について</p> <p>香港日本人学校は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、教育局の指示により、2020年1月27日(月)から6月5日まで休校措置が続いた。その後、学校は登校再開したものの、再度7月1</p>

3日から9月22日まで感染拡大防止のため休校措置がとられた。また、学校再開後も防疫措置により半日授業を余儀なくされ、9月の再開後、11月半ばまで半日授業が続いていた。11月18日、ようやく通常授業となった矢先、11月23日より1年生～3年生は再び休校となった。それに続き、4年生～6年生、中学部1～3年生も12月2日から休校となった。2月1日現在、まだ休校が続いている。

このように休校が長期化する中、香港日本人学校は児童・生徒の学びを止めないために昨年2月よりHPとメールを使つての課題配信や課題の指導を行ってきた。そして、2020年4月21日より、オンラインでの学習を開始し、Zoomを使用しての授業や、GoogleClassroom、ロイロノートを使用しての課題学習を行ってきた。今年度派遣の教師が約3ヶ月渡航できなかったことも学びを保障する上で困難を極めた要因の一つである。この間、学校では香港にいる教員と日本にいる教員がZoomを活用してTTを組んで学習を進めたり、香港にいる教員のみで授業を行ったりしていた。午後は教員が自作した動画等を中心に課題を出し、児童・生徒は自分のペースで反復練習をしたり、発展的な問題に挑戦したりするなど、学習にじっくり取り組んだ。

学校再開後も感染対策として以下のような制限があった。

- ・対面での話し合い活動の禁止
- ・人数制限（大勢の人が一つの場所に集まらない）
- ・異学年の交流の禁止
- ・教具の共有の禁止
- ・学校での食事の禁止 等

そのため、学校では授業中に話し合い活動や互いの顔を見ての発表は難しく、委員会や縦割り班活動等の異学年交流もできなかった。他にも全校朝会や保護者懇談会等も人数の制限があったため学校で行うことはできなかった。

そこでオンラインの利点を生かし、以下の活動にも取り組んできた。対話的で深い学びを行うために、Zoomを活用し児童・生徒が互いの意見を交換し学び合う場面を作ったり、児童・生徒が帰宅してからZoomを活用しての委員会活動や縦割り班活動、係活動等を行ったりした。他にも、朝会や集会等もZoomを活用しオンラインで行うことで密を避け、全校生で行うことができた。保護者参観や面談も保護者が学校に来ることなく、自宅（あるいは仕事場）と学校を繋いで行うことができた。現状では、登校が再開したとしても通常の教育活動を行うのは難しい。そのような状況下でもオンライン会議システムを授業の中でも効果的に活用し、児童・生徒同士が顔を見て話し合う活動や対話的な活動が行える環境を整備し、ともに考え学び合う学習を成立させていきたいと考える。また、香港校や大埔校、国際学級をオンラインで繋ぎ、児童生徒、教員同士が互いの学びを交換し合い学びを深め合い広め合う学習活動は教育的価値が大きい。そういった活動を続けていくためにも、「学びを止めない教育体制構築」は必要不可欠である。

（3）AG5より

グローバル化に伴い、多くの日本人が海外に在住している。その子どもたちの現地での教育には様々な制約があり、日本国内と同等の教育を受けることは困難である。また、学校の特色は国や地域によって様々で、それぞれの在外教育施設が抱えている課題も多様である。そこで文部科学省は、在外教育施設の課題の解決やより高度なグローバル人材育成を目指し、AG5（在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業）を実施した。香港日本人学校もその一役を担い、「高度グローバル人材の基礎的資質形成のプログラム開発」に取り組んでいる。

(4) GIGA スクール構想より

「令和2年10月22日『4 GIGA スクール構想の実現パッケージ』」では、日本の学校のICT環境整備状況は脆弱であるとともに、地域間での整備状況の格差も大きく危機的状況にあると述べている。また、学校の授業におけるデジタル機器の使用時間はOECD加盟国で最下位、学校外でのICT利用は、学習面ではOECD平均以下、学習外ではOECD平均以上となっている。このような状況を打開すべく、GIGAスクール構想の実現に向け文部科学省より提案がなされた。香港日本人学校は、その中でも「1人1台端末」、「高速通信ネットワーク環境の実現」に向け取組を進めている。

5. 取組の実施日程

日程	取組内容
	小…香港校小学部 中…香港校中学部 大…大埔校 GC…香港校グローバルクラス IS…大埔校国際学級
9月	(1) -①ICT機器を活用した授業の保護者参観(大・小 随時) (1) -②オンライン会議システムを活用した全校集会(大・小・中8月) (1) -③オンライン会議システムを活用した保護者懇談会 (大9月・小5月・中7月) (1) -④オンライン会議システムを活用した保護者面談(大・小・中10月) (1) -⑥オンライン会議システムを活用した委員会活動(大・中9月～活動中) (1) -⑦オンライン会議システムを活用した授業見学(大→GC) (2) -③オンライン職員研修会(GC・中探究学習)
10月	(1) -⑤オンライン会議システムを活用した面接指導(中) (1) -⑪オンライン会議システムを活用した日本の中学生との交流 中学部2年生と大阪の中学校2年生 10月12日(月)・10月16日(金)・11月23日(月)
11月	(1) -⑬オンライン会議システムを活用した外部講師による出張講座 11月17日(火) (1) -⑧実践1 大埔校6年生修学旅行事前学習プレゼン 11月23日(月)第4校時 (1) -⑫オンライン会議システムを活用した特別授業 落語会 桂三若師匠 11月27日(金)
12月	(1) -⑨三校合同朝会(学校紹介) 12月22日(火) (2) -②GC授業見学(中止)
1月	(1) -⑩オンライン会議システムを活用した現地校児童との交流 大埔校4年生と現地校(WKS) 1月12日(火) (1) -⑧実践3 中学部紹介(大・小6年生向け) 1月29日(金) 第3校時, 第4校時 (2) -②IS授業見学(中止) ※オンラインで学習発表会実施 1月30日(土)(大)
2月	(1) -⑧実践2 2月25日(木)中止 香港校6年生修学旅行事前学習プレゼン (2) -①専門家による研修会「Zoomを使ったオンライン授業のあり方」(予定) ※講師:東京学芸大学教授 (1) …児童・生徒の諸活動 (2) …教職員研修等

6. 具体的な取組内容

(1) 授業等の実践について

【実施する授業等の実践】

- ①ICT 機器を活用した授業の保護者参観
- ②オンライン会議システムを活用した全校集会，式等
- ③オンライン会議システムを活用した保護者懇談会
- ④オンライン会議システムを活用した面談
- ⑤オンライン会議システムを活用した面接指導
- ⑥オンライン会議システムを活用した委員会活動
- ⑦オンライン会議システムを活用した授業見学
- ⑧香港校と大埔校のオンライン会議システムを活用した交流活動
 - 実践1 大埔校6年生から香港校6年生へ向けての修学旅行事前報告会
 - 実践2 香港校6年生から大埔校6年生へ向けての修学旅行事前報告会
 - 実践3 香港校中学部から大埔校6年生及び香港校6年生へ向けての中学部紹介
- ⑨オンライン会議システムを活用した三校合同朝会
- ⑩オンライン会議システムを活用した現地校児童との交流（現地校と大埔校4年生で実施）
- ⑪オンライン会議システムを活用した日本の中学生との交流（香港校中学部2年と大阪の中学校2年生）
- ⑫オンライン会議システムを活用した特別授業（落語会）
- ⑬オンライン会議システムを活用した外部講師による出張講座

(2) 職員研修について

【実施する研修会について】

- ①専門家による研修会「Zoomを使ったオンライン授業のあり方」（講師：東京学芸大教授）
- ②オンライン会議システムを活用した職員研修（GCやISの授業見学等）
- ③オンライン職員研修会（小学部GC・中学部探究学習）

※各実践の詳細については別紙参照

7. 取組の成果

Wi-Fi が整備されたことにより，休校期間中も学校の各教室からオンライン学習を行うことができた。また，学校が再開されても対面での授業ができないことや異学年での交流ができない，大人数で集まらない等様々な制限があったが，オンラインでこれらの活動を行うことができた。一番の大きな成果はこのコロナ禍でも学びを止めずに子どもたちが集団で関わり合いながら学習を進められたことである。

オンライン学習での取組の成果は以下の通りである。

(1) 対面での話し合い活動・異学年交流

1-④ オンライン会議システムを活用した面談

「コロナウイルス防疫措置により，実際に対面して面談が行えなかったが，オンライン会議システムを使うことにより，今年度の学校の方針や児童生徒の学習状況・進路選択に関わる情報交換などを行うことができた。」

1-⑥ オンライン会議システムを活用した委員会活動

「学校では異学年の交流が難しいため，オンラインでの異学年交流は，児童にとっても貴重な体験であり，教育的価値は大きいと考える。」

学校再開後も教育活動において様々な制限があり、児童・生徒同士が対面で話し合う活動を行うのは難しい状況であった。そのような状況下でもオンライン会議システムを活用することで、児童・生徒同士が顔を見て話し合う活動や教師との面談ができ、対話的な活動が行いやすい環境であった。これにより、子どもたちの学びの広がりや深まりを実現させることができた。また、異学年の交流にも制限があったため、オンラインでの異学年交流は、児童・生徒にとっても貴重な体験であり、教育的価値が大きかった。

(2) 香港内外から参加可能

1-⑤ オンライン会議システムを活用した面接指導

「早期に日本に帰国してしまった生徒とも、面接練習を実施することができた。」

1-⑨ オンライン会議システムを活用した三校合同朝会

「香港校、大埔校の全校児童・生徒が一斉の同じ講話を聞く機会をつくることができた。」

1-⑫ オンライン会議システムを活用した特別授業（落語会）

「コロナウイルス防疫措置により、実際に目の前で児童生徒全員が集まったの落語会は行えないが、オンライン会議システムを使うことにより、昨年度同様の学習をすることができた。」

香港内の学校は休校期間が長かったため、また感染防止のため、日本へ一時帰国する児童・生徒が多かった。そして、学校再開後も香港に戻れない児童・生徒がいた。オンライン学習であれば、香港にいらなくても参加することができる。学校再開後、まだ日本や中国にいる児童・生徒も Zoom を通して学習に参加することができた。様々な環境においても人と人がつながり、コミュニケーション活動ができることを学ぶことができた。また、普段であればお互いの学校へ足を運ばなければできない交流活動も香港日本人学校同士（大埔校・香港校）や現地校、日本の学校とも交流することができ、お互いの学校の様子を知るとともに新たな観点を手に入れる良い機会となった。

(3) 集会、授業参観等の実施

1-② オンライン会議システムを活用した全校集会

「コロナウイルス防疫措置により、大人数が集まったの集会は行えないが、オンライン会議システムを使うことにより、伝えたい内容を一緒に共有することができ、今後の見通しについて前向きに思える児童・生徒が増えていた。」

1-④ オンライン会議システムを活用した面談

「例年、必ず対面で行っていたが、ZOOM を活用することで、仕事をされている保護者や生徒本人と3か所を結んで面談ができ、保護者にとっては時間を有効に利用できて助かったという感想が多かった。」

学校再開後も感染防止のため様々な規制があり、集合人数についても厳しい規制があった。一度に多くの人数が集まれないという状況だったが、Zoom を活用することで、式や集会に教室から参加することができた。また、授業参観や保護者懇談会等にも Zoom を活用し、家庭と学校をつなぐことで実施することができた。人が集まれないという状況下でも、感染を防ぎながら学校行事を行うことができ、保護者に対しても学校の様子を知らせることができた。

(4) オンラインならではの学習

児童・生徒が学校に登校し、クラス全員が揃って学習することの価値は測り知れない。しかし、今年度の香港の学校には政府から様々な規制が課されていたので、学校が再開しても禁止された活動がある。特に影響を受けた教科として音楽がある。楽器の演奏に関して、打楽器等は消毒すれば使用できたが、鍵盤ハーモニカやリコーダーの演奏、マスクをはずしての合唱は禁止されていたため学校で行うことができなかった。しかし、自宅からのオンライン学習であれば通信環境による音のずれは多少あるが、リコーダー等を演奏することができた。他にも、算数の「三角形」や「四角形」の授業では、自宅からのオンライン学習により「今から家の中にある三角形の物を持ってきなさい」と教師は指示を出し、児童は身近にあるもので一人一人が実際に三角形に触れながら学習することができた。また、自宅でオンライン学習を行うため、保護者は児童・生徒がどのような学習をしているのか把握できる。授業後は親子で学習に取り組んだり、難しい課題にも親の声掛けがあったりと、学校と家庭が協力して学習を進めることができたのもオンライン学習だからこそと言える。

8. 今後の課題・展望

(1) 家庭のインターネット環境

1-⑥ オンライン会議システムを活用した委員会活動

「課題としては、インターネット環境が児童それぞれで違うため、技術的な問題で委員会に参加できない児童・生徒や、参加してもすぐに途切れてしまう児童・生徒もいたことが挙げられる。」

課題としてまず挙げられるのは、インターネット環境である。各家庭でそれぞれに違うため、上手く繋がらず参加できない児童・生徒や、参加してもすぐに途切れてしまう児童・生徒がいた。また、途中で画面が止まってしまったり、スムーズに映像が流れなかったりすることも多々あった。今後、オンライン会議システム活用を推進するためにこの課題に対してどう対処していくのか検討が必要である。

(2) 校内のインターネット環境

1-④ オンライン会議システムを活用した面談

「Wi-Fiの不具合が生じ、時間を変更したり、延長したりして実施しなければならないことがあった。」

1-⑧ 香港校と大埔校のオンライン会議システムを活用した交流活動

「映像が配信途中で止まってしまったりトラブルがあった。」

オンライン学習を始めたころには、教師間でもデジタル機器の使い方等について経験や知識に差があったが、研修を行ったり、教材研究を学年で行ったりすることで授業を行う上での教師間のスキルの差は埋まってきた。しかし、サーバーが落ちてしまったり、Wi-Fiが使用できなくなってしまう際に、それに対応できず授業が行えない日があった。すぐにミーティングを行い、児童・生徒にどう対応するか検討し連絡することができたので、その日の午前は課題をさせ、教員は自宅に戻り午後は自宅からオンラインで授業を行うなどの対応をすることができた。次の日にはWi-Fiも使えるようになり、通常のオンライン学習を行うことができたが、いつまた同じことが起こるかはわからない。これと同様または予期せぬことが起こる可能性もあることを考え、校内インターネット環境の更なる整備を継続して行うとともに、「技術的なトラブルに誰がどう対応するのか」、「児童・生徒の学習はどのようなのか」等、事前に対応策を考えておく必要がある。

(3) 児童・生徒の把握やセキュリティに関して

1-① ICT機器を活用した授業の保護者参観

「多くの方に参観してもらったが、関係者かどうかを把握することが難しい場面が見られた。(セキュリティ面での課題)」

1-② オンライン会議システムを活用した全校集会

「一度に画面に児童が映らないため、参加児童の把握が難しい。」

Zoom等のオンライン会議システムを使用すると、大勢の人が一度に参加することができ全校集会や保護者参観等も行うことができる反面、画面上で一度に確認できる人数が決まっているため(25人)、参加児童・生徒の把握が難しい。また、IDとパスワードを知っていれば誰でも参加できてしまうので、保護者参観等では関係者なのかどうかの判断が難しく、セキュリティ面での不安も感じた。外部の人にはIDやパスワードを教えない、待機室等の機能を使うなど、セキュリティには十分に配慮して取り組んできたが、今後はより安全性を高めていく必要がある。また、教員が自宅からリモートで安全に業務を行うための体制づくりも急務である。

(4) 体調面・精神面における不安

オンライン学習では、ずっと画面を見続けるといけないこともあり、児童・生徒の体調面や精神面を考慮し普通の授業よりも短い時間で授業を行い、休憩の時間も長くとるようにした。それでも、慣れない頃は体調を崩す児童・生徒もいた。オンライン学習だけが原因ではないかもしれないが校内の視力検査においても、全学年とも平均視力が昨年度より低下しているという結果になった。また、校内で行ったアンケートでは、「疲労を感じている」、「イライラ・怒りを感じている」、「不安を感じている」等の項目に対する回答がどの学年も50%を超える結果となった。体調面や精神面に不安をもつ児童・生徒へのサポート体制を充実させる必要がある。

9. 所感

オンライン学習を始めた当初は教師も児童・生徒も、そして保護者もまずは慣れることに精一杯であった。教師はいつも以上に教材研究に時間を費やさねばならず、更には慣れないICT機器の操作に困惑していた。長時間画面を見ての学習や普段とは違った生活リズムに体調を崩す児童・生徒もいた。保護者も、児童・生徒が授業に入れないことや機器の操作が分からないことがあるため、授業につきっきりで目が離せない日が続いていた。日が経つにつれオンライン学習にも慣れてくると、教師の課題は授業の質を上げることに変わり、児童・生徒は自分たちでできることを考え取り組み、保護者はそっと見守るようになってきた。もちろん課題はあるものの、普通の学校と同じようなサイクルで授業ができるようになってきた。これは教師にとっても児童・生徒にとっても大きな成長だといえる。

休校期間中の対策として行ってきたオンライン学習だが、登校が可能になってからも使えることが多くあった。例えば、香港から遠く離れた地にある日本の学校の児童・生徒とLiveで交流することができ貴重な体験となった。児童・生徒が授業や課題でまとめたことを発表する際には、一人一台タブレットを持ち、オンラインで行うことにより友達の伝えたかったことがより明確に分かる。学級便りをオンラインで配布することにより、児童・生徒や保護者はいつでもどこでも確認することができる。教師が作成した教材等を共有ドライブに保存することで教師間での共有が容易にできるようになった。今後もICTを活用した学習の研究を続け、より一層活用していきたい。

本事業により Wi-Fi が整備され、どの教室からもオンライン学習ができるようになった。教師や児童・生徒の成長もあり、オンラインを効果的に活用した授業ができるようになってきた。今後も休校が長期化したり、再開後にまた急に休校になったり、また、様々な制約が課されたりしたとしても学習を進める態勢はほぼ整ったといえる。とはいえ、児童・生徒は学校に来て教師や友達と関わり合いながら学習することで学びを深め合い、社会性を身に付け自立に向け成長できると考える。やはり児童・生徒のいない学校は静かで寂しい。教室から聞こえてくる児童・生徒の発表する声、校庭で友達と楽しそうに遊ぶ児童・生徒の姿。学校は児童・生徒がいるからこそ活気に溢れている。休校が続き、オンライン学習を行ってきたからこそ学校に児童・生徒がいることの温かさを再認識することができた。今後も教育の易と不易を見極めつつ、ICT を学校経営によりよく導入し、活用していきたい。